

足利風

ashikaga-fu

2024
秋号
Vol.91



画：伊村恵利佳
書：風喜人

足利市民活動センター

開館時間：平日 10:00～19:00

休館日：土・日・祝日・第3月曜日

〒326-0052

栃木県足利市相生町1-1

足利市生涯学習センター3F

TEL 0284 (44) 7311

FAX 0284 (44) 7312

Mail info@shimin-act.jp

HP <http://www.shimin-act.jp>

HP QR コード



☆ ご案内 ☆

- * 特集！
「手仕事～用の美の極み」
- * 言葉のあやとり
「STANDARD=シンプルさ・
普遍性・機能美・・・」
- * 私のボランティアことはじめ
「今、何故義兼なのか～『足利義兼の
真実』発刊にあたって～」
- * マチのちゃぶ台
「相田みつお生誕百年」
- * INFORMATION

* 特集！ *

「手仕事～用の美の極み」

まだ生まれた時のまんまの
うすももいろの膝小僧 鹿の瞳（ひとみ）
ふくらんだ胸
ひとかかえのつつじ色の愛

洪充淑（ホン・ユンスク） 茨木のり子・訳

以前、ソウルでボランティア講演のあと、韓国の女子高生と話をした時に、現在の若者たちは知らないと思って、27歳で日本留学中に獄死した詩人・尹東柱（ユン・ドンジュ）について、立原道造との抒情詩の比較に話題が及んだ。その時、女子高生のまなざしは憧憬一色となった・・・ことを思い出した。

今年（2024年）は、日本の民藝運動の柳宗悦と関わりの深い「朝鮮民族美術館設立百年にあたる。柳たちの民藝運動は、“普段使いの器”をはじめ、暮らしに根差した日用品・無名の作者たちへの“用の美”へのリスペクトにある。駒場の日本民藝館へも足繁く通ったこともある。また、柳の発見した“木喰仏”の微笑への愛着も深いものがある。

柳たちが尊重した“手仕事の重み”は、その地域の特性や歴史と強くつながっています。それらの力を借りつつ仕事が行なわれている。

民藝ともかかわりの深かった水俣の石牟礼道子さんは、若者たちに語り継いでいきたいこととして、「手仕事です」と語っている。思想や理念ではなく、手を動かすことがどれだけ大切なことなのかを語りたい、と力を籠めます。

手仕事を忘れなければ、本当に大切なものとのつながりを見失うことはない・・・介護や絵を画くことも手仕事です・・・と。

私たちの近くにも、ケアワーカーで絵を画いている若い女性がいる。その魅力の源泉は・・・こんなところにあるのかも知れない。

（M生）



* 言葉のあやとり *

「STANDARD = シンプルさ・普遍性・機能美・・・」

“自分基準・スタンダード”だって、進化する！

“自分にとっての気持ちよさ”を追求する！

“普通が素敵で、ステキが普通！”

“スタンダードを決めるのは自分。センスを感じるのは他人。”

私のボランティアことはじめ

「今、何故義兼なのか～『足利義兼の真実』発刊にあたって～」

羽山 弘一

古都足利形成の根元は、義兼が足利庄堀ノ内を西方浄土の城郭の堀として造築し、中央に持仏堂（後の鑢阿寺）を創建、丑寅に居館を建て侍所や武器庫、蔵、納屋等を整備し、足利庄の核となる平城（祈りの陣屋）を築いた。更に同時期に鎌倉の幕府創建に深く関わり、胡桃ヶ谷に足利屋敷を造り、西方に極楽寺（浄妙寺）を建立、その地積は数万坪に及ぶ。又、若き日の義兼は鳥羽天皇の皇女、八条院に伺候し、従五位下に叙爵された貴種である。平家討伐の令旨を出した高倉宮^{もちひとお}以仁王とも近くで知っていた。頼朝とは八幡太郎義家が互いの曾祖父で有り、頼朝の母は熱田大宮司^{すえのり}季範の娘でその義妹が義兼の母である。頼朝挙兵時には幕府創設の準備のため多大な負担を担った。開幕にあたっては頼朝の影の副臣に徹し己れを滅し、頼朝の意志を補佐し、和を求め戦いの怨霊を鎮めるために祈り続け、高野山住僧鑢阿聖人に導かれ東大寺にて出家した。後に法華房鑢阿聖人より、鑢阿の名を頂く。そして、頼朝の死と共に義称鑢阿・義兼は「この世の和平」と「源姓足利氏の興隆」を永遠の祈りとして入定された。嫡子義氏…貞氏、尊氏と義兼入定の祈りの信条を源姓足利氏代々の頭領が誠実に守り実践し、室町文化が華開いたのである。



足利人は鑢阿寺は知っているも義兼を知らない。かつて政府のふるさと創生一億円事業で市は識者の意見を制して尊氏像を建てた。このことは足利市民の責任とは言えない。歴史学者は戦国期にあつて残された古書の著述を覇者の論理で歴史を組立て書き記す。だから尊氏来足の記録は無いが、鑢阿寺を創建した義兼より尊氏が有名だからである。

私は義兼の足跡を尋ね歩いた。高野山にては元不動堂の本尊は皇女待賢門院の御願で建立されたことを知った。不動明王の御顔が片目を開き、片目を細める様相であり、義兼は入定の折、血書でこの姿での祈りを書き残した（旧足利市史）。古書の記録に無くても、義兼の高野山にて法華房鑢阿聖人に出会い修行した事実が明らかである。

最近、美福門院得子の墓が高野山で見付かった事を報道で知った。美福門院は鳥羽天皇の皇后で、その皇女八条院に義兼は奉仕していた折、高野山にも奉供で行ったのである。

此の度、郷土の偉人足利義兼を多くの皆様に知って頂きたく、義兼の信条の視点からその歴史を辿って義兼の真実の姿を探求した。そして、八十半ばの老生が初めて書いた拙文と挿絵で絵双紙「足利義兼の真実」として発刊した。義兼入定の祈りは情報化社会となった今も、「この世の和平」は「世界の平和の祈り」となって生き続けている。

* マチのちゃぶ台 *

「相田みつを生誕百年」

相田みつを生誕百年だそうだ。阪神淡路大震災の3日目に被災地支援で神戸・長田に入った。商店街は壊滅状態だったが意欲ある人たちが数日後バラックで商いを始めた。その店の奥には相田さんの言葉が貼り出されていた。「相田さんに毎日励まされているんです」と涙ながらに皆な話してくれた。相田さんは区画整理の地域代表として行政に対峙した。「子どもたちは通学路に生えているタンポポの花などを見て、自然と情操教育されている。その道をアスファルトで埋め尽くしていいのか?!」また、全国で講演をした時には必ず、「私を育ててくれた足利の人たちは観音様です。こんな観音様のいる山と川のある街・足利にぜひ一度遊びに来てください。」で締めくくった。

・・“毀誉褒貶は在る。・・だって、人間だもの” 合掌。 （鈴木光尚）

* INFORMATION *

※コロナ感染対策により内容が変更・中止になる場合があります。

☆「まちの縁側」～読書サロンへのご招待～

だれにでも心に残る一冊の本があります。童話・小説・詩集・等々。
その一冊の本を導きの糸として、案内人を囲んで、参加者のみなさんと一緒に、
ワイワイガヤガヤ・と。新しい人との出会いや物語を紡いでみませんか。

★令和6年10月18日(金) PM2:00～4:00

- * 本 : 「中村天風の生きる手本」(宇野千代)
- * 案内人 : 木村 寛 さん
- * ひとこと: 大正から昭和にかけて活躍した思想家・中村天風の「心身統一法」というヨガを基本とした心と体を整える修行法を実践。呼吸法・体操法・座禅法などもあるがポジティブ・シンキングによって、心と体のバランスを整えるという考え方。かつては松下幸之助・稲盛和夫・現在では大谷翔平(ドジャース)もトレーニングに取り入れている。作家では、宇野千代・川端康成・小林秀雄・など。私も昔、大病をした折、天風の本を読んで、大病を乗り越えた経験がある。ぜひ皆さんもこの機会にご一読ご参加下さい。

★令和6年11月22日(金) PM2:00～4:00

- * 本 : 「すらすら読める養生訓」(立川昭二)
- * 案内人 : 北村 隆 さん
- * ひとこと: 身体がこわれるのが先か。気持ちが悪くなるのが先か。「養生訓」ではメンタルヘルスの大事さを説いている。食欲色欲の過ぎたるは害の元。腹八分目に、酒はほろ酔いに。「老後をいかに楽しむか」人間として、人間らしく生きるという事は、実は人間らしく病み、癒え、死ぬ、ということかもしれない。みなさん、ぜひご参加を!

■参加費: 無料

■会場/問い合わせ: 足利市民活動センター ☎44-7311

☆「企画展」(交流コーナー) (土・日・祝日・第3月曜日は休館日)

- * 10月 7日(月)～10月17日(木) 好彩会色鉛筆画展
- * 10月22日(火)～10月31日(木) 足利絵手紙の会展
- * 11月 5日(火)～11月14日(木) 川島直人水彩画展
- * 11月19日(火)～11月28日(木) NPO 法人足利歴史まちづくりの会展
- * 12月 2日(月)～12月12日(木) なべのそこ展
- * 12月17日(火)～12月26日(木) 足利子どものえがお展

※展示時間・・・10:00～19:00 ただし最終日は15:00まで

☆「相談室」&「茶論」 ※詳しくは、別紙参照

- * 相談室 = 10月 9日(水) 14:00～16:00 「日本茶を美味しく淹れる」
11月27日(水) 14:00～16:00 「まちづくりを楽しく効果的に」
12月11日(水) 14:00～16:00 「整理整頓のポイント」
- * 茶 論「ぼ・ぼ・ら出前講座」
10月24日(木) 14:00～16:00 「NPOの運営」
11月14日(木) 14:00～16:00 「地域のつながり」

編集後記

足利には俳聖・芭蕉の句碑がいくつかある。ただし足利へは来たことは無い。「笈の小文」には～西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫道するものは一なり。～芭蕉は心底西行に傾倒していた。その西行は五十歳頃に四国へ旅をしている。敬慕する崇徳院の陵墓参拝と弘法大師の遺跡巡りだ。四国遍路がブームだ。“おせったい”の心を体験するのは良いことに違いない。～“どの道も浄土につづく遍路道”という名句もある。ボランティアの道もそのようでありたい。(カサブランカ)